

海のゴミの シンデレラストーリー

水中ゴミ拾い×アップサイクル

文・写真

東 真七水

text & photo by Manami Azuma



ゴミ袋を抱えている著者。

「スキューバダイビング×ゴミ拾い」「水中ごみ拾い」を専門としたダイビングショップ「Dr・blue」でゴミ拾いダイビングインストラクターを務める東真七水です。海底に沈んだゴミを楽しみながら回収し、水中ゴミ拾いをマリンアクティビティとして広める活動をしています。

海の悪者が可愛く生まれ変わる「アップサイクル」

海底に沈んだプラスチックゴミは、海洋生物の命を奪う悪者としてニュースで取り上げられます。ゴミそのものに焦点が当たりやすいですが、海洋ゴミ問題は人間の行動が招いた結果であり、ゴミ自らが海に流れ出したわけではありません。本来、人間の役に立つために生まれてきたはずの物が、用が済み、ポイ捨てをされた瞬間から、海を汚す厄介な存在となってしまいます。つまり海洋ゴミは悪者でありながら、被害者的存在でもあるのです。

ただ、昨今ゴミを素材として活用し新たな価値を付加して再生する「アップサイクル」が注目されています。既に、ビーチクリーンで回収し

たゴミをアクセサリや小物に作り替える企業もあり、全国で販売もされています。これを水中ゴミ拾いでも応用し、ダイバーが回収した海底のゴミを、マグネットやキーホルダーに作り替えるアップサイクルの活動が今年スタートしました。海底に沈んだゴミの回収は技術開発が難しく、ダイバーしか拾えないといわれているため、これは究極のアップサイクルです。また回収した本人の手で洗浄、粉碎して、キーホルダーを作るワークショップも実施。水中ゴミの回収体験に資源循環の要素が加わることで、自分の手で新たな命を吹き込むという貴重な体験ができるのです。

アップサイクルワークショップ、資源循環のためだけではない

環境活動で最も大切なことは継続することです。そのために閃いたのが、水中でのゴミ拾い体験を形に残すアップサイクルワークショップです。自分の手で生まれ変わらせた物が側にあることで、環境への思いを風化させない「お守り」の

ような存在になると感じます。他の誰かではなく自分で拾ったゴミ、これが情緒的な価値を大きく高めます。たった一回のゴミ拾い体験で終わらせないためには、ゴミ拾いにより付加価値をつけ、形に残すことが一つのきっかけとなるのではないのでしょうか。



ダイバーが回収した水中ゴミをアップサイクルしたキーホルダー。

Profile

奈良県生まれ。大学を卒業後化粧品会社に就職。沖縄の綺麗な海を守りたいと2020年に沖縄に移住し、2022年、水中ごみ拾い専門店Dr.blueを立ち上げる。
【Dr.blue ウェブサイト】
www.dr-blue.okinawa

